
higher

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

higher

【Nコード】

N0620B

【作者名】

Litaly

【あらすじ】

私はただ上を目指す。右でも左でもなく、北でも南でもなく、ただひたすらに上を。腕に巻きついた鎖。そう、まるで誰かが言っていたみたいなやつ。いつかそれを断ち切るの。その為に私は「至高」を目指す……柳川チョーキングの舞台となる街の一角で起こる他愛ない出来事。人生の有り様なんていつだって一瞬が変える。彼等の人生も僕の人生も、そしてあなたの人生もね。

高さって大事だと思う。

うん、絶対大事。

値段だって、身長だって、なんだってそう。

高いほうがいいに決まってるじゃない。

間違いないわ。

だから私はこの世界のあらゆる「高さ」を手に入れるの。

さて、そろそろ行かなきゃね。

今日は光男とのデート。

光男は私の満足する「高さ」をたくさん持ってる。
私の100%の人。

東京に出て来て4年、

予定通り丸の内OLになり、

予定通りの彼氏を見つけ、

私は予定通りの「高み」へとたどり着いた。
悪くないわ。

私は「高み」へと上るべき女。

それが許された数少ない女。

「光男」

エリ、

今日は君の為にヘリコプターを用意したんだ。

この街を、

この街のどんな高層ビルより高い場所から眺めて見たいって、
いつか君言ってたろう？

「エリ」

まあ、本当？

嬉しいわ、光男。

愛してるわよ。

「光男」

僕も君を愛してる。

君の幸せが僕の幸せだ。

だから僕は君の為に何だって出来る。

さあ、こっちへおいで。

視界に映るあらゆる建物が小さく霞んでいく。

あらゆる高層ビルを超えた高さ。

はるか新宿の上空。

あらゆる人生、行為は今私の視界の下で行われている。

馬鹿げた事だと思う？

でもこれが私の人生。

まるで映画やドラマのような、

そんな人生を歩める数少ない女。

それがこの私。

私が生まれたのは日本列島の最北端。

市でも町でもない、「村」

その中でも、私の生まれた家は特に貧しかった。

病を患って酒浸りの日々を送る父、

東京まで出稼ぎに行つて滅多に帰つてこない母親。

お金が払えなくて、修学旅行すら一度も行けなかった。

極めつけは父親の虐待。

私の初めての人は父親だった。

泣き喚く私の口を押さえて、

むりやり父は私に「ソレ」を捻じ込んだ。

病を患っているとはいえ、

父のちからは13歳だった私の敵うものではなかった。

何度も逃げ出そうと思った。

そつする計画を企てた。

でも、13歳の少女に何が出来るっていうの？

せいぜい捕まつて保護施設にでも入れられるだけ。

一度は耐え切れなくなつて、

東京まで母親を訪ねた事もあった。

でも、母親は他に男を見つけてた。

そして哀れむように私に言った。

「ごめんなさい」と。

私は18歳になるのを待った。

必死で堪え続けた。

18になつたその日、私は東京へと逃げ出した。

父親も母親もいない東京へと。

18歳の女の子が保証人も住所も無く東京でやっていく事が、
どれだけ大変な事か分かる？

私はたくさんの方達のどす黒いソレを受け入れた。
もちろん楽な事じゃなかったけど、
血のつながった家族のソレと比べれば、
伴う「苦しみ」なんて屁でもなかったわ。

私はそうやって稼いだお金で住所を手に入れ、
新しい仕事に就いた。

念願のOL。

ちっぽけな夢？

いいえ、これはステップ。

きちんと段を踏んで私は高みに上らなくちゃいけない。

私は人が本来、人生を通して味わう苦痛の多くを

高々20年で味わったんですもの。

これからの私は、その分をとりもどさなきゃいけない。

「普通」じゃ駄目なのよ。

「至高」でなければ。

今私の視界に映っているのは、そんな至高の風景。
至高から眺める風景。

隣には、誰もが羨む様な、至高の男。

島一つ買ってしまう財力、

185cmの身長、

甘いルックス、

それでいて自分を驕ってはいない。

光男はね、二世なんかじゃないわ。

わずか20代で、自分の身一つで成り上がったの。

彼もまた孤独を抱いて生きてきた。

そして、至高を目指し、たどり着いた数少ない人間。

私に相応しい100%の男。

「光男」

僕は今まで一人で至高を目指してがんばってきた。

この地位を手に入れてからはそれを守り抜くために、

本当に多くのものを犠牲にしてきた。

でも僕は君と出会って知ってしまったんだ。

僕にはまだ足りない物がある。

それは、共に歩むべきひとだ。

そしてそれはきつと君なんだと思う。

僕と一緒に、これからを目指してはくれないだろうか？

彼は窓の外に小さく見える街から視線を外し、

私を真っ直ぐに見つめる。

とても純粹で綺麗な目。

「エリ」

ありがとう。

とても嬉しいわ。

私も同じ気持ちよ。

でも、ごめんなさい。

もう少しだけ待って。

色々整理しなきゃならないことがあるの。

きつとそれを怠れば、

私達はすぐさまこの至高から

引きずりおろされてしまう事になるわ。

分かるでしょう？

「光男」

分かってる。

でも僕達は出会ってからもう1年以上経っているんだ。

そろそろ君にも真剣に考えて欲しいんだよ。

僕は今年で30になる。

世間の目を気にするつもりは無いけど、

僕にだって男としてのプライドがある。

その事だけは分かっておいて欲しいんだ。

いや、そんなのは便宜的に並べた綺麗な飾りでしかないな。

知りたいんだよ。

君の全てを。

ごめん……… 急かすような言い方をしてしまって。

僕はいつも性急に過ぎていけないね。

すまない。

光男はまた窓の外へと視線を戻す。

付き合い初めて1年、

私はまだ光男と寝ていない。

そこにはやっぱり色んな理由がある。

私は今まで色んな男に抱かれて来たから

その事で光男を不快にさせてはしまわないだろうかとか、
今まで私を抱いてきた男と光男を、

私は重ねてしまわないだろうかとか、

どこかの映画であつたように、

こういう二人が結ばれた時、そこにあつたはずの

一番大切なものが消えてしまうのではないだろうかとか、
そつという考えが私を臆病にさせてしまう。

非現実的な風景の中で

非現実的な思慮に思いを巡らせていると、

だんだん物事のあるべき姿が見えなくなってしまう。

私は本当は何を願っているんだろう？

「光男」

さあ、もうすぐ着く。

至高のディナーの用意はもう出来ているはずだ。

あらゆるものが、

あらゆる人が僕達を至高に導く為に多くの努力をしている。
その事だけは君も忘れてはいけないよ。

「エリ」

ええ、分かってるわ。

本当に感謝してる。

あなたにも、彼らにも。

光男が小さく笑う。

男らしいきりつとした表情に、

少しのあどけなさが宿る。

彼が持っている会社はとても大きい。

その系列の企業、店舗がこの街のあちこちにある。

その全てが彼の為のヘリポートとなる。

「光男」

このディナーの後、

友人が経営するジャズバーに顔を出さなくちゃならないんだが、
君はどうする？

「エリ」

そこは私に相応しい場所？

「光男」

ああ、作りも、雇ってるミュージシャンも悪くない。

たまにはのんびりジャズに耳を傾けてみるのもいいんじゃないかな。

「エリ」

そうね、私も行くわ。

「光男」

ありがとう。

さあ、じゃあ食べよう。

稀な才能と稀な味覚を備えた人間が、

何十年もの努力を積み重ねて作り上げる料理。

至高の味。

私はそれを一口ひとくち、ゆっくりと味わう。

暖かいスープを体中の傷口にゆっくりと染み渡らせる。

食事の後、私達は30分ばかりのんびりと街を歩き、

彼の友人のジャズバーへと向かった。

.....

「ジャズバーのオーナー」

やあ、よく来たね。

隣の女性は光男のパートナーかい？

「光男」

ああ、僕にとって、至高の女性だ。

今まで紹介できなくてすまない。

君にはもう少し早く紹介しておきたかったんだけどね。

「オーナー」

いいっていいって。

綺麗な人じゃないか。

幸せそうで何よりだよ。

それで、早速例の件なんだがな………

「光男」

エリ、すまない。

あつちの席で少しくつろいでてくれないか？

少し仕事の話をしなくちゃならないんだ。

君の為にもう少しきちんとプライベートを確立しなければな、
とはいっても思ってるんだけどね。

本当に申し訳ない。

「エリ」

ええ、かまわないわ。

ついてきたいって言ったのは私だもの。

あなたの大切な物は私の大切な物よ。

仕事も、友人も大切にしなきゃね。

「光男」

君は本当に僕のいい理解者だ。

ありがとう。

光男が申し訳なさそうに微笑を作る。

私も微笑みで答える。

私はステージから少し離れたテーブルにつき、

カクテルを一口飲む。

そしてステージを眺める。

ジャズは嫌いじゃない。

そこには何かしら私のルーツと通ずるものがある。

まあ、聞くに堪えないような

しょうもないジャズバンドのほうが多いけれど。

今ステージで演奏している人たちは

彼の言っていたとおりなかなか悪くない。

ドラムの人はどうやら本場の黒人さんみたい。

まるで雑然とばら撒かれた不均一な空間を掴んで、それをきちんとあるべき場所に叩きつけるような、力強く正確で、それでいて優しい音。日本人にはなかなか出せない音だわ。

私は今日一日の疲れもあって、少しうとうとしてしまう。

誰かが私にジャケットを羽織らせてくれる。きっと光男だわ。

ありがとう、と言って私は視線をあげる。でも私の目に映ったのは光男ではなかった。

「黒人の男」

すまない、起こしてしまったね。

空調の中で寝てしまうと体に悪いと思ったんだ。ここへはよく来るのかい？

「エリ」

いいわ、気を使ってくれてありがとう。

ここへ来たのは初めてよ。

あなた、流暢な日本語を話すのね。

「黒人の男」

こつちに来て長いんだ。

僕達の演奏は君を眠りに誘ってしまったかな？
はは。

「エリ」

ごめんなさい。

とても疲れていたの。

だから気を悪くしないで。

あなた達の演奏はとても素晴らしかったわ。
心を許して眠ってしまえるくらい。

眠っている時も、暖かさを感じたわ。

きっとあなたは優しい人なのね。

「黒人の男」

ありがとう。

でも僕は決して優しい男なんかではないよ。

頭の中はいつだって悔いる事で一杯だ。

僕の音楽はね、音から作り出すものではないんだ。

その空間の隠れた場所で、

そつと見つけられるのを待ってる何かを引きずり出して、

みんなが感じ取れるような形を与えてやる。

そつという音楽なんだ。

君が優しいと感じたのなら、

それはきつと君の中に眠っている優しさなのだろう。

「エリ」

うまいこと言うのね。

もし私に恋人がいなければあなたに惹かれてしまいそう。
あなたには愛する人はいるのかしら？

「黒人の男」

ああ、いたよ。

遠い昔にね。

多分君がまだ言葉すら知らなかった頃の話だ。

僕には妻と、

そして息子が一人いる。

と言っても、

息子とはお互い顔をあわせた事すら無いんだけれどね。

「エリ」

きつと深い事情があるのね。

愛しい人に会えないなんて、とても悲しい事だわ。

いつか会えるといいわね。

「黒人の男」

多分、もう二度と会えはしないだろう。

僕達はたくさんのおちを犯しすぎた。

でも君の優しさには素直に感謝するよ。

「エリ」

私こそ、優しくなんかないわ。

傲慢で、愚かな女。

高みに対する執着で自分を見失った、

本当に愚かな女なのよ。

ごめんなさいね、

こんな夜はつい愚痴っぽくなっていけないわ。

「黒人の男」

いや、いいんだ。

こんな夜は誰かの愚痴が子守唄にすらなり得る。
もし良かったら聞かせてくれないか？

「エリ」

私の初めての男はね、

父親だったの。

もちろん私は嫌がったわ。

でも、ちからじゃとても敵わないからね。

13歳の頃の話よ。

母親を頼りたかったけれど、

母親は他に男を作って出て行ったわ。

辛かった。

本当に。

18になつて父親の元から逃げ出した。

そして私は東京に出てきた。

私は必死だった。

私の18年間を取り戻すために。

保証人もいないから家も借りられないし、

家もないから仕事にもつけない。

仕方がないから体売ったわ。

そうやって稼いだ金でどうにか住む所を手に入れた。

20年近く生きて、初めて手にした「私の居場所」

それまでの私には、

本当に居場所なんてなかったのよ。

本当に……

でも全ては遅すぎた。

私には失った物が多すぎた。

もう普通じゃ満足出来なくなっていたの。

「普通」でいることにすら苛立ち、憤りを感じてしまったし、それはきつとみんなが「普通」に対して抱いている感情よりもはるかに強いもののなの。

私は至高を目指した。

その過程の中にだけ、本当に安らげる自分がいた。

哀れな女でしょ。

彼のこと？

どうなんだろうな、愛してるのかな？

もう私には私のことなんて分からないわ。

「黒人の男」

神様は本当に皮肉屋だ。

多くの事を人々に教え、導くのに、

僕ら自身の事だけは決して教えてはくれない。

それこそが規律より、秩序より何より僕らが欲しているもののなのね。

だから僕達は過ちを犯す。

愛すら見失ってしまう。

そして望まない事ばかりが起こってしまう。

僕が君にしてやれる事は決して多くない。

君がその人生のあらゆる場面で何をどう感じてきたのか、

君の体験のほとんどを、正しい意味で理解する事すら僕には出来ない。

きっと僕がここでどんな言葉を並べたところで、君の乾きは癒えないだろう。

僕の生まれた国ではね、

音楽というのは芸術でもなければ、エンターテイメントでもないんだ。

人が生まれた時歌うべき歌があつて、人が死ぬ時歌うべき歌がある。

ただ生きる事、それが音楽なんだ。

君は今深い霧の中を彷徨っている。

理不尽に巻きつけられた鎖を引きずりながら、

北でも南でもなく、

右でも左でもなく、

ただ上を目指している。

北や南、右や左にはきつと悲しい事が付きまとうから。

じゃあなぜ上を目指すのか？

鎖は下へと垂れ下がっているから。

君の鎖を解いてやる事は、

残念ながら僕には出来ない。

上を目指す事に戸惑いを感じたら、

歩むべき理由を見失ったら、

耳を澄ませなさい。

聴こえてくる音に耳を傾けなさい。

音は生きる事そのものなんだ。

きつと君が行くべき方向からその音は聞こえてくるだろう。

僕は多分もう愛する人たちに会うことは出来ない。

でもね、音楽は教えてくれる。

彼らが今どこで笑っているのか、泣いているのか。

僕達はもう二度と会えないけれど、心はいつだって共にある。

僕が音楽を奏でる理由さ。

私の目から何かがこぼれてくる。

13歳のあの日を最後に、決して流れる事はなかった涙。
堪えていたんじゃない。

それを流す事すら、「私としての行為」じゃなくなってしまったから。

私はただひたすらにここまで逃げてきた。

あらゆる音から耳を閉ざして。

「生きる事」から目を閉ざして。

私が望んでいた事。

鎖を断ち切る事。

鎖は私の体から真つ暗な穴に向かって伸びてる。

延々と真下に続くとても暗く深い穴。

だから私は無心に上を目指した。

高みを目指した。

そうすればいつかこの鎖を引きちぎれると思った。

でも違う。

私が本当に望んでいた事。

私を知る事。

私は心から笑いたかった。

泣きたかった。

私だけの為に。

生きようと思った。

迷う事があれば、音に耳を傾ければいい。

きっと私の笑顔と涙をつれて来てくれるから。

それが私の望む事。

「エリ」

ありがとう。

今日、あなたに会えてよかった。

あなたの「音」に触れられて良かった。

あなたの愛する人が幸福であることを、
心から祈ってる。

彼が優しく微笑む。

私も微笑を返したかったけれど、

涙がこみ上げてきて、うまくできない。

「光男」

！！

おい！

あんた！！

僕のエリに何してる！！！！

何で泣いてるんだエリ！！

大丈夫か！？？

くそっ、ぶっ飛ばしてやる！！！！

「エリ」

ちょ、ちよつと光男！

違うの！！

「光男」

こんちきしょうめ！！

エリは俺が守るって決めたんだ！

死んでも守るって決めたんだ！！！！

表出る！！！！

ちよつとガタイがいいからってな、いい気になるなよ！

「黒人の男」

ほう、僕とやるっていうのかい？

いい度胸だ。

さあ、表で盛大にやろうじゃないか。

「エリ」

ちょ、ちよつと何言ってるの！

やめてってば！！

ばきっ

「光男」

へぶしっ！！！！！！

「エリ」

もういいよ！！

もうやめて光男！！

「黒人の男」

なんだい、その程度かい？

彼女を守るんじゃないかったのかい？

あんたの心意気はその程度だったのかい？
所詮はおぼっちゃんというところか。

「光男」

うだうだうるさい！！

ちよつと足が滑っただけだ！！

この程度のパンチで調子に乗るなよ！

こいつが、エリが味わってきたのは、

こんなへばい苦しみじゃないんだ！！！！！！

「黒人の男」

なら、力で示してくれないか？

あんたの口と財力が達者なのは良く分かった。

「光男」

うおおおー！！

べこ

「光男」

あべしっー！！！！

「光男」

くっそ、こ、こっ、この！

お、お前なんて、お前なんてなあ……………
ぐふっ……………

「エリ」

光男！！！！

大丈夫！！？

光男！！

しっかりしてー！！！！

「黒人の男」

あ、ちょっとやりすぎてしまったか。
すまない。

彼氏、なかなかいい男じゃないか。
いざとなったら体を張って女を守る。
簡単な事だがなかなかできることじゃない。

僕に出来るのは君に信じる「きっかけ」を与えてやる事くらいだ。
もしそれでもまた迷う事があれば、
このジャズバーに来なさい。
最高の音を用意して待ってる。

「エリ」

あなた、名前はなんていうの？

「黒人の男」

マディ。

マディ・ヘブンス。

君は？

「エリ」

私はエリ。

本当に、

本当にありがとうマディ。

最後はなんだか

もつはちゃめちゃん終わり方だったけれど、

私はあの日の事を忘れない。

あの日から私は幾らか変わった。

私も、光男も。

本当に少しずつだけれど、

自分が何を「嬉しい事」だと感じるのか、

何を「悲しい事」だと感じるのか、その本当の意味を、

私は「私」を理解し始めている。

光男はあれから、体を鍛える！といって、

持っていた会社のほとんどを手放して

よく分からない武道の修行に明け暮れている。

私達の「至高」のあり方が変わりつつある。

マディが、そして彼の家族が本当に幸せである事を祈る。

この3階建ての古いアパートの一室から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0620b/>

higher

2010年12月30日06時53分発行